勿忘草其二　あなたの声をもう一度…

春功

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勿忘草其二　あなたの声をもう一度…

【Ｎコード】
Ｎ９６６０Ｅ

【作者名】
春功

【あらすじ】
ある島に存在する草。その草には非現実とも言える力があった。それは「忘れさせる」という力。それを食べさえすれば人間は不可能だった思い出を本当の意味で消すことが出来る。もし、そんなことが出来るならば、あなたはこれを飲みますか？人の思い出を巡る悲劇の物語。二つ目の悲劇が始まる。舞台は戦争中の本国。勿忘草其一の数十年前のお話になります。其一を読むとさらに分かりやすいです。

告解の序幕（前書き）

誰にでも、大切な人がいる。
一緒にいればそれだけでいい。
でも、もし
大切な人が、耐えようも無いほどの絶望に苛まされた時。
――あなたはその人の思いを、忘れさせられますか？

告解の序幕

自分は信じていた。この仕事が私の生き甲斐だと。
手紙は、人を幸せに出来るとそう思っていた。
幸せの象徴だと思った。
でも、違った。
私には、いつまでも忘れさせる事しか出来ない。
私は一日のこの時間を何よりも大事にしていた。

告解の序幕

チリンチリン
自転車のベルを鳴らす。

「こんにちは」

「あ、ごくろうさまです」

少し立ち止まり、軽い挨拶と会釈をしてまた走り始める。
私は、坂本彰。郵便配達員をしている。この仕事を始めてもう七年になる。
今、私は自転車に乗ってこの付近を配達していた。
この付近の郵便配達件数は一日に約百数件。それを三人の配達官で分担している。
中央で一括して集められた手紙がこのしがない末端の郵便局まで流される。

そこから各々私達が自転車を使いこの地域を配達していた。
この街の名を箙野（たがの）。都心から離れた片田舎である。
田舎で道が舗装されていないので、自転車で配達するのは辛い。
もっと、配達に便利なものはないだろうか、と時に思うこともある。
配達には根性が必要だった。
自動二輪車のような移動機械、そんな身近な機械など、この田舎に有る訳がなかった。
やっとの事でこの本国も欧米の文化が流入し始めたのに。
それがいまや発展どころか…
今、この本国は戦争していた。
原因は小さないざこざだったのに。
国民どころか、関係のない他国までが巻き込まれてしまっている。
この箙野も例外じゃない。すでに目ぼしい若者は赤紙によって呼ばれていた。
もうこの付近には前みたいな活気は殆ど無い。
それでもこの町の人たちは、一所懸命に頑張っていた。
子は戦争。親は子の帰りを待つ。それしか出来なかった中で。
徴兵された子供の帰りを待って、残された人たちは笑って生きていくことを決めあった。
いつか来る未来の為に。
もう少し私も若ければ赤紙に呼ばれていただろう。
舗装されていない砂利道を走ること十分。
私の目の前に古ぼけた駅の待合場みたいな建物がやっと見えた。
ボロボロの瓦に所々、木が腐っている一軒家。もとは廃駅を利用した建物だ。
さっさと自転車を止めて、私は一直線に同僚が待っているところへ行った。
そう、この古ぼけた一軒家こそが私達の仕事場。
箙野郵便局だった。

「坂本さん、ちょっといいですか？」

私を含め三人のうちの同僚、山本拓が呼んだ。

頭は丸く剃っていて坊主みたいだが、顔は案外しっかりとしている。

彼は、まだこの仕事を始めて三年。私達の中でも一番年齢が若かった。

もちろん赤紙規定の年齢に準じている年齢である。

だが、彼は生まれつき体が弱かったため、特別兵役免除だった。

そのためこの付近唯一の青年とも言えた。

「なんだ？」

「来週の件なんですが…僕は都心の病院へ行かなくてはいけないので、私の地区の配達をお願いしたいんです」

「ああ。その話なら聞いている。…わかった。気をつけて行ってこいよ」

「ハイっ。ありがとうございます」

山本が一礼して自分の机に戻っていった。

事実、二つの地区を配達するのは辛い。

だが仕方がないのだ。この田舎の郵便局にこれ以上の人手は割けないのだから。

私は窓から見える青く透き通る空を見た。そこには一筋だけ。雲が流れている。まるで飛行機雲みたいな雲。

この青い空に消えないたった一つの雲。

なぜだかその雲が消えないのが私には不思議に思えた。

2

この街で郵便配達をし、いろいろな発見が私にはあった。
それはこの仕事でしか味わえないような、大切なものだった。
私は信じている。この仕事が人を幸せに出来る事を。
遠く離れたあの街に住む家族が、こんな田舎まで手紙を送る。
ただそれだけなのに、その手紙には言葉で言い表せない宝石が詰め込まれていた。
もちろん戦争も然りだった。徴兵された人が家族に、生きている幸せをその手紙に詰め込む。
それには人間の想いがたくさん詰まっている。
そう思っていた頃、私はとある家に行った。
山本拓の代わりに私が彼の地区を配達している時だった。
その家は常緑樹の垣根が綺麗に整えられていて、庭には杜若、末摘花、など
私の知らない花もあったがそこは一種の桃源郷にさえ見えた。
此処だけ、外界から隔離されているような平穏な時間が流れていた。
なにか心の奥底が揺さぶられる、そんな感じだった。

「ごめんくださいーー　郵便です」

声をかけるとその直後、奥から一人（老婆）がでてきた。
外見から見るともう70歳は過ぎてそうな皺だらけの老婆だった。

「すいません。水原ーー綾芽さん？のお家でしょうか？」

私はつい聞いてしまった。この人が「綾芽」という可愛らしい名前とは失礼ながらにも思えなかった。どちらかと言うと「フネ」とか「ハナコ」みたいな古臭い感じがした。
もしかしたら私が間違えてしまったのだろうか？

「はい～　そいです～」

訛りが掛かった、嗄れた声だった。
普通の人が見れば名前と姿のギャップに幻滅してしまうだろう。
私はそのまま老婆に手紙を渡した。
老婆はその手紙の宛名を見るなり、目を広げ幽霊にでも遭ったかような驚きを見せた。
そしてそのまま老婆は私に目をくれず、奥に早足で引っ込んで行った。

「？」

私は何がなんだか解からいまま呆然と立ち尽くした。
あの手紙は何か不幸の報せだったのだろうか？
そうなると私自身、気が重い。
手紙は人を幸せに出来るのだからその逆も当然在りうる。
かくいう、私も何度かそういう場面に出遭った事があった。

（悪い事をしてしまったかな……）

私は家の人に声をかけずそのまま玄関を後にした。
ただこの家の中は……一瞬だけかもしれない、柔らかな白梅香の匂いがした。

その後私は病院から帰ってきた山本にあの家について聞いた。

「ああ、坂本さんも行ったんですか。本当に綺麗ですよね、あの家……」

私もそうだなと呟いて、あの家のすばらしさを思い浮かべる。

そしてふと、思い出した事があった。

「そういえば、水原さんという人は面白い老婆だな……」

「えっ？」

山本の顔が強ばった。私がなにか見当はずれの事を言ったみたいな。

山本の顔が急に精気が無くなったように暗くなった。

「……坂本さん……　知らないんですか……？」

「うん？」

一体私が何を知らないと言うのか？

そう言う山本の顔が余計に空しく悲しそうになった。

「あの家の水原綾芽さんという女性は、まだ僕より若いんですよ……」

「――っ？」

「坂本さんが見たのはきっとお手伝いさんですよ。確か…フネさん

とか言う名の」

確かにあの老婆には似つかわしくない近代的な名前。

そしてあの花壇はもっと若い人が考えたような植え方で。そこにはなにか初々しさと言うものが漂っているように感じた。

「若い女性？　私は見なかったが……」

「水原さんは僕と同じように……病気らしいんですよ…。だから、お手伝いさんが来て身の回りの事をやってもらっているらしいんです。もちろん毎日ではないらしいんですけど」

そうか……、そうだったのか。

「山本……おまえはその人を、見たことがあるのか？」

「数年前に見たことが……。とても綺麗な人で近所でも噂だったんですよ。少し前に好きな人ができたらしくて。でも」

「でも？」

まるで蝉のような儚さを醸しだして山本は黙った。

花瓶の花が暑さで枯れて死んでいた。

「少し前に結構話題になったんです。その恋人が、結婚を前提にした恋人が、軍隊に強制召集されたそうです。赤紙によって。これからが……幸せという時期だったらしいですよ」

なんと言うことだ。ここにも戦争の被害者がいたのだ。

やっとのことで掴めそうな幸せが……訳の分らない物に奪われる。

そんな理不尽な事が人の意思に関係なく、各地で起こっていた。
一瞬、手紙を渡した時の老婆の姿が頭の中に思い浮かんだ。

「？　それなら……　もしかして、あの手紙は」

「ええ、徴兵された恋人からですよ」

私はその時のことを思い返した。確かに、あの時の老婆はギョッと驚いて奥に引っ込んで行った。もちろん私を無視して。
……きっと、その手紙にも。
二人の間の言葉では云えない気持ちで溢れていたのに違いない。
生きている喜びを二人で分ち合ったのだ。

「そうか……知らなかった……」

あの一種の桃源郷に思えた所にそんな事情があったなんて。
私は刹那、言葉を失っていた。

「それで、水原さんの病気は？」

「生まれつき視力が極端に弱いみたいで、今はもうほとんど、見えないはずです。だから白紙も免除になったそうですよ」

白紙規定。
こうした紙の種類は三種類あった。赤紙、白紙、黒紙。
これらの紙の規定では赤紙は強制召集令状、白紙は国民の強制軍事産業投入。
そして黒紙。別名、万歳紙と呼ばれ、それは兵の死亡通告を示す。
これを受け取った家族は「本国万歳」と叫んで、泣きながら万歳三唱する事に由来している。

そして、白紙規定の軍事産業とは末端の兵器部品工場や織物工場で働く事である。
確かに目が見えなければこの仕事は不可能だ。
「そう言ったら、僕も同じなんですけどね。でも――」
「でも？」
山本の表情が苦悶を浮かべた。
「やるせないですよね。いくらなんでも……」
「……」
山本自身も何となく分かっていたみたいだった。自分の中に渦巻く得体の知れない感情を。
「だって、僕たちがこうやって配達しても、いい事ばかりじゃないんですから」
その言葉が私をひどく揺さぶった。確かに【黒達】（一斉黒紙速達郵便）命令は、私たちまでも家族から恨まれる事もある。
ジリジリと、蜩が喉に物を詰まらせたような声で鳴いていた。
「そうだな。だけど、戦争中にそんな事言ってられないだろう？」
「そうですけど……」
まだ山本は、納得がいかない表情を見せていた。
だけど、それも現実だった。

それは免除者に対する世間の眼でもよく分かった。
自分の息子は赤紙に呼ばれ、死んでいく。
それなのに兵役不向きという理由で、戦場には送り込まれずそのまま日常を過ごせるのだから。それが規定者家族にとってどんな辛い事か山本も重々承知していた。

「もういい。早く、仕事に戻れ」

「はい……」

私は山本が仕事机につく姿を目で追う。
誰もが戦争など嫌っている証拠をまざまざと見せ付けられたのだ。
正直、自分も――何度かそんな事を思った事があった。
できるなら私も争いのない世界を望みたい。
でも、未だそんな世界は実現されていない――

3

それから私は、ある思いに駆られる様になった。水原綾芽本人を一目でも見てみたいと、そう思った。水原さんの家の事情があるからかもしれなかった。
あれ以降、私は向こう配達区域まで配達する機会が無かった。
でも、私には興味があった。変な言い方かもしれないが、彼女がどのような思いで愛する人を待っているのか。それは辛い事に変わりないかもしれない。でも恋人を待つにはその環境は辛いはずだった。そんな気持ちを知りたかった。

「山本……」

「はい？」

配達記録をまとめていた山本がペンを置いてこっちを向いた。

「なんですか？」

「……」

私の気持ちは変わらない。一度でいい。一度会って、恥ずかしいけれど、何か自分に役に立つ事がないのかと思っていた。兵役にも規定外でみんな頑張って生きているのに私だけ取り残された気分を振り払いたいが為に。なんでもいい。私の出来る事を――

「今度から配達区域、変わってもらえないか？」

私の思わぬ丁寧な提案に山本は一瞬驚きの表情を見せた。

「えっ――」

「頼む、山本」

「……い、いいですけど、僕の配達地域は遠いですよ。いいんですか？坂本さん」

「……あ」

何を言っているんだ私は……

「？」

「……すまん。もういい、仕事に戻ってくれ」
「？……はあ。じゃあ、今度から配達区域を変わればいいんですね」
「……」
私は見逃すような軽い相槌を一回打った。そのまま山本から視線を外す。
ラジオからは本国の戦線状況が絶え間無く流れていた。
本国は東南系大陸を占領。
大勝。連戦連勝。
そんな言葉が流れてきた。
それがなんだか私にとって馬鹿げた事にしか聞こえない。
例え、本当に勝っていてもそこには儚くも犠牲者がいるはずなのだから。
それに比べれば、私達は幸せ者に違いない。
でもこの辛さは何だろうか、私には全く分からなかった。
この言いようが無い不安感が自分を襲った。
まだ、戦争は終結しそうにもない。

初めて配達区域が変わり、新鮮感が漂うが、今の私にそれを感じる余裕なんてなかった。
ついに会えるかもしれないのだ。
水原綾芽に。
いつもより急ぎ調子になってしまい、配達も少し雑になった。さらに挨拶をされても気付かずに通り過ぎて、近所の人に不信がられた。
私は緊張している事が目に見えた。誰も私のこの高ぶる心を静められないだろう。

私は水原さんの家に着いた。自転車を止めて、家の外観を見る。
垣根の犬黄楊は帯白色の小花を咲かせ、花壇には花。そこには蝶が飛び交う。
ここだけ何か時間が切り取られているような、既視感を感じた。
それほどゆっくりとし優しい場所だった。

「水原さん、郵便です」

私は玄関の前に立ってあの老婆（フネさん）が来るのを待った。
またあの訛り声で迎えてくれるはず。
だが、人が来る気配がしなかった。

（留守……？）

「水原さん、郵便です！」

知らぬまに声が大きくなっていた。
だが、やはり声は返ってこなかった……

「ごめんください、水原さん？」

私は無意識の内に玄関の扉を開けていた。
鍵が閉まっていると思われたドアは抵抗なく、開いてしまった。

「？」

玄関の中から冷たい空気が流れ出していった。
人の気配が無い。まるで冷たい機械のような感じがした。

（いないのに、鍵が開いている？）

「水原さん！郵便です！」

本来ならここまで呼んでいないなら、諦めてポストに手紙を送入して配達に戻るはずだった。

でも私は諦められなかった。

どうしても、一目でも見てみたい。

諦めろ！諦めるんだ！

心の中でそう誰かが叫んだ。それに私は苦しくなって、拳に力を入れた。

その時だった。

「あの、郵便なら……中庭の方へ――」

？

確かに小さい声がここまで聞こえた。家のずっと奥から。後の方の言葉がよく聞こえなかったが、やはり誰かいたらしい。

私はその声に惹かれるように玄関を出て、桃源郷のような花壇、木々を横に見ながら中庭の方へ回りこんだ。

そこは玄関の方からは見えない一角だったが、玄関付近よりも綺麗に花々が咲き誇っていた。

夕顔、橘、牡丹、などなど。夏の風物詩ともいえる花々が色鮮やかに咲いていた。

私はそのまま花壇の方から、家のほうへ眼を移す。

「！」

何枚もの戸があって、縁側の戸が開いていた。すぐそこが縁側の廊下。

そしてその奥に障子を隔てた部屋の中にひとつのベッド。
そこには一人の人がベッドの中で上半身を起こして本を開いていた。
その女の人は髪が艶やかで長く、肩口で合わせてあってリボンで纏められていた。顔は例えるなら柔和な聖母のような誰でも見惚れてしまうような美しさ。まるで欧米でいう『もでる』（よく意味が解からないが）というものなのだろう。格好は掛け布団で見えなかったが、花柄の寝間着を着ているようだった。
その姿に自分が声を失っている事に私は気付いていなかった。

「？」

女性が音に反応して読みかけの本を閉じた。そして、こっちの方へ視線を向ける。
綺麗でゆっくりとした動作で。しかしそれは眼を瞑ったまま。

「郵便ですか？」

綺麗な澄み切った声だった。

「え、あ、はい。郵便です……」

「それなら、申し訳ありませんが、私は眼が不自由なので、そこに置いといて頂けませんか？」

「……は、はあ」

その後、一瞬の空白が二人の間があった。
そしてその女性は疑問を持った表情で首を傾げた。

「？　あの、いつもの人と違うんですか？」

私は驚いた。

「分かるんですか？」

「ええ、声の質や話し方がいつもと違いますから。それに足音もいつもの人とは違います……」

自分の体中に稲妻のような戦慄が駆け巡った感じがした。目が見えない彼女の感覚は常人よりも鋭かった。呆然と彼女を見つめてから、ふっと自分が抱えていた疑問を思い出した。

「あの、今日は……あのお婆さんは、いらっしゃらないのですか？」

「フネさん……ですか？それならちょっとの間、身内の方へ……」

そう言って、水原さんは突如、言葉を切った。

確かに普通、見知らぬ人間に理由を言うのは少し躊躇うだろう。

その突然の話題切りに、場の雰囲気が重くなった。私はそんな雰囲気が嫌いだった。だからわざと間違えるように言った。

「腰を痛めたのですか？」

「はい？」

「いえ、フネさん、年配の方だからもしかしたらと……」

「……くすくす」

「……違いました??」

水原さんは右手を口元に持っていき、清楚に笑った。

その姿が、本当に端麗で綺麗だった。

「あっ、申し遅れました。私は郵便局の坂本彰と言います」

「水原綾芽です。坂本さんは面白いお方なんですね……いつもの人は、たまにしか会った事がないですが、どこか臆病な感じがして、少し頼りない感じがありました。規律はしっかりしていたみたいでしたが……」

たぶん山本の事らしい。確かに彼は仕事には真面目なのだが、やはり戦役免除者なので配達時には緊張して行動していたのに違いない。

「今日はその人ではないのですね、病気なのですか?」

「いえ、ちょっと事情がありまして。今後、彼と配達区域を代わってもらいました」

「そうなんですか……」

実際は私の我儘だったが、本当の事を言える自信が無かった。なんでも人のせいにしておきたかった。きっと私の性分なのだろう。

「手紙はここに置いておきますね」

縁側に手紙を置いてひとまず踵を返した。

「ちょっと待って下さい、あの……その手紙、もしかして【黒い】ですか？」

「？」

突如呼び止められ、振り返る。彼女の顔は本当に何かに対して心配しているような表情で今にも泣きそうにも見えた。そしてその心配はどう見ても彼女の恋人に対してであるのだ。

彼女も心の奥底で願っているのだ。黒紙ではなく恋人からの生の手紙が来る事に。

「いえ、ただの手紙ですよ……」

水原綾芽は誰にも気付かれないような小さな安堵の溜め息をついた。私はそれを見てしまった。心からの安堵。きっと彼女の心の中では今思っているのだろう。

まだ生きてくれている、と。

「良かった……」

「そ、それじゃ…、失礼します」

私は走ってその場を後にした。水原さんが何か声を発していたが私にはまるで聞こえなかった。

なぜなら、今私は彼女の恋人に対する実直さに背中を向けているのだから。

4

その日の夜、久し振りに故郷の友人から電話が掛かってきた。
私は戦争による郵便局の異動でここに勤務している。しかし本当の故郷は箍野ではないのだ。
私の故郷は辺境地、夕日島。

「もしもし。如月??」

「何を言っているんだ、忘れたのか?私だよ。如月忠光だ」

「ああ!久し振りじゃないか、どうしたんだ?」

夕日島で一番の親交があった友人だったが、実際こうやって話すのは十年ぶりぐらいだった。

「いや、昔の夢を見て、それで君の事を思い出したんだ」

??

「ああ、元気にしているのか?」

「……ああ」

一瞬の間がそこにはあった。

「?」

「元気だ……」

「……何かあったのか、忠光?」

また、数秒の間が空いた。
その後、意を決したのか忠光は、暗い声で口を開いた。
「……なあ、彰」
「？」
――――お前は、「罪」を忘れたいと思うか？
「？」
「絶望があって、どうしても、苦しいとき。お前は、お前は…それを忘れたいか？」
何かの宗教勧誘を受けているようにも思えた。だが、それにしては真剣味がある。
「う、あ……ど、どうしたんだ？」
「もし、この世に全てを忘れさせるモノがあったら、お前はそれを使うか？」
話の筋が良く分からないが、論理が飛躍しすぎている。だから、私は冷静に応えた。
「忠光？そんなもの、この世にあるわけ無いだろ。だって――」
――――あるんだ。
「　あ　」

「あるんだよ、悲しみを消すモノが」

「な、何を、言ってるんだ？　そんなのあるわけ無いだろ、そんなのがあったら大騒ぎになる」

全うなことを言ってみたが、受話器を持つ、私の手が、無意識のうちに小刻みに震えた。

「……悪い、すまん。突飛も無い話をしてしまった」

「……」

自分の思考がうまくまとまらなかった。唇が乾いてうまく言葉にさえできなかった。

ただ、鵜呑みにするしかなかった。頭の中で感覚的に忠光の言葉が、ぐるぐると廻っていた。

そして最後に、聞き取れないぐらい小さな声で、

――――もし、忘れたいのなら、お前にそれをやるよ――

「……今、何て言った」

「いや、何でもない……気にしないでくれ。また気が向いたらお前からも連絡してくれ。じゃ、切るから」

「おい、ちょっと！待て――」

何とかひき（・・）止めようとしたが、そのまま切れてしまった。

たったそれだけの電話だったが何となく不気味で気持ちが悪かっ

た。
それはたったそれだけの電話なのに十年ぶりの友人が電話をしてきた事だ。
そして何より。
――――全てを忘れさせるモノがあるんだ。
その言葉がどうしても、頭から離れなかった。
現実にそんなものなんて無い。そう判っていても、心がそれをどこか認めない。
心は空想を追い求めやすいからか？
（どうしたんだ？　忠光……）
しかし、今の私がそんな事を考えても、分かる訳が無かった。
夕日島にいる友人の事が心配だったが、明日の配達の為に早く床に入って寝た。
その夜はいつもの夜とは違って、何度も眼が覚めてしまった…
あの言葉が消えないせいで。

5

次の日の配達、私はいつも通りに郵便物を配達していた。
今日も、配達物に黒紙はない。
それどころか【黒達】命令もない。
外の世界がどうなっているか分からないが、若者のいないこの町、箍野はすこぶる平和だった。
どれだけ戦争が人を殺しているのか知らなくても、ここだけは平穏だった。
私はなるべく早く配達を終えると、その足で郵便局に戻らず、そのまま水原綾芽の家に赴いた。

昨日今日ではそうそう人の気持ちなど代わらないかもしれないが、少しでもあの人と親しみを持ち合いたかった。
それは、あの人の辛さを慰めたいとか、人道的立場から言っているわけではない。
ただ、自分のため。何かできることが無いか模索している自分のため。
水原綾芽に少しでも、役に立てるならそれで良し。できないならまた次。
要は自分が誰かのために役に立ちたいと思っているだけ。
私の基本的な行動理念はそれだけだった。
私は水原家につくと玄関の呼び鈴は鳴らさず、フネさんがいない事を知っていたので、そのまま、一直線に綺麗な花壇をぬけ中庭に向かった。
そして、そこには昨日と同じように水原綾芽がベッドに寝ていて、上半身起き上がって焦げ茶色の表紙をした本を読んでいた。

「こんにちは」

私の声に気づくと、一瞬、不安そうな表情をして、眼を瞑ったまま、私のほうに振り返った。

「こんにちは、坂本さん。郵便ですか？」

その声にはつい先ほど見せた不安そうな感じは見られなかった。
まるでその声の主が誰だか分かったような表情で、慎ましく笑った。

「いえ、配達ではないんです。この近くを通ったので、よければ少しお邪魔してもよろしいですか？」

「ええ、どうぞ。フネさんは居ないのでお茶も出せませんが……」

そう言って、苦痛に満ちた笑顔をみせた。私の来訪した理由が配達ではなかったことに気づいたのだろう。

詰まるも、何か大好きなものを目の前で取られてしまったような喪失感。

なにより、彼女の瞳は赤く腫れていた。

それに気付いたが、私は何も言わなかった。

「ええ、構いませんよ」

私は縁側に近寄り、ゆっくりと腰を下ろした。

「フネさんはいつ頃、お戻りになるのですか？」

一息ついて、水原さんに聞いてみた。

「明日の今頃には戻ってくるとは言っていましたけど…」

「お一人では、不便ではないですか？」

ビクッと、水原さんの体が強張るのが分かった。

何か触れてはいけないものに触れてしまったようなそんな感じの。

「……い、いえ。眼が見えなくとも、この家の中ならば、生活の最低限度の場所には、見えなくても、ちゃんと行けますから」

苦笑いでそう、言っていた。

「……手紙」

「！？」

「手紙は……出しているのですか？」

「？　い、いえ」

「手紙を待つだけでは、長い時間でしょう。彼に手紙は出さないんですか？」

「……知っていたんですか。私の恋人が兵役招集にかかった事を」

「ええ。失礼とは思いましたけど、風の便りで……」

「そうですか……。私からは……手紙を出さないんです。彼からの手紙を待つだけ」

首を横に振りながら彼女は、違う、と言った。

「彼が帰ってくるのを待つだけです。どんなに長くなろうとも」

「……」

「それしか出来ないんです、私には」

そう決意した表情で言っていた。

その後、何かしら世間話を楽しくしていたが、ほとんど頭に残らなかった。半刻ほど、他愛も無い話をして、彼女が疲れ顔だったので、私は一先ずそこから離れた。

帰り道、ずっと頭から離れなかったのは、彼女の決意した顔だっ

た。
決意して「帰ってくるのを待つ」といった彼女の顔には、一切の迷いは無かったようにはっきりしていた。
そんな事を考えながら、水原さんの家から出て少し経った所で、私は郵便帽を忘れた事に気付いた。
急いで引き返し、あの郵便帽が置いてあるだろう縁側へ向かった。
縁側には私の郵便帽が置いてあった。
確かにそこに置き忘れていたようだった。彼女はすでにお昼寝モード全開なのか、すやすやと眠っていた。起こさないように引き返そうときびすを返した時、あるものが私の眼に映った。
それは彼女がいる部屋の畳の上に散らばる、何枚もの紙切れ。
黄ばんだ古そうなものから真っ白い新しいものまで。
見るから無造作に、その紙がこの部屋に据え落ちていた。

「これは？……」

注視すると、それには縦書きの文字羅列でぎっしりと埋め尽くされていた。
――それは、手紙だった。
恋人からの、何枚にも亘る彼女への手紙。
まさしく、二人の生きる宝物といえるもの。
水原さんに気付かれないように縁側から上がり、その手紙を引き寄せて確かめてみた。
確かに手紙は、綺麗な書体で、しっかりとした文章で、書かれている。
その内容を確かめようとして、じっと……

「う、ん……」

突然の彼女の声に、私は思わず振り向く。

確かめると水原さんはまだ、寝ている。
ほっ、と安堵。
安らかな寝息が聞こえる中、罪悪感を覚えながらも、それをよく観察してみる。

（――え？）

そのどれもが、くしゃくしゃだった。
他の何枚か確かめて見ても。
どの紙も儚く崩れていた。
まるで、泣きながらその手紙を力強く抱きしめたみたいに。
文字すら、滲んでよく読めない。
かろうじて読めるのは、恋人の名前だけ。

「――――君か……」

ぽそりと、その名を読んでみる。
気丈にも、いつも笑顔を見せていた水原綾芽。
しかしやはり、その辛さには耐えられるものではなかったのだろう。
もし万が一、仮定の話だがこの恋人が亡くなったら、彼女はどうなってしまうのだろう。
私には耐えられない。
そんな経験をした事が無いから解からないが、それ以前に自分の心が壊れてしまうだろう。
待つだけの焦燥感。
その募る思いは誰にも分からない。
どれだけその人を愛していても、もしかしたら戻らないかもしれないという恐怖には勝てないだろう。
きっと彼女は心の中では、悩み苦しみ続けているのだ…

6

郵便局に入ると、重々しい雰囲気が漂っていた。
暗い影みたいなものが部屋中にさしているかのように見えた。

「どうしたんだ？」

山本と他の同僚が無言のまま、机の上に仕分けされてある郵便物を見て固まっている。

「坂本さん、来たんですよ。例のあれが……」

例のあれ？
その郵便物を確かめるために、同僚を押しのけるようにその机へと向かう。
そこには一枚の書類と…黒紙の束。

「こ、黒達命令か！？」

その一枚の書類には黒達命令と書かれている。黒達命令とは一斉黒紙速達郵便命令の事。
黒紙は本来一枚一枚配達されるものではない。戦死した者の家族にはすぐに戦死が伝えられるわけではないのだ。軍部が一定量に達するまで作戦部が集め、保管し、ある一定量に達すると政府の指令書とともに一斉に各地の郵便局に軍部から流されるのだ。単独で来る黒紙は、裕福な軍部のエリートぐらいのものである。箍野付近でそんなエリートが存在するはずもない。
私が経験する中でこの黒達命令は過去二回経験している。

つまりこの命令で三度目。
当たり前だが、いい気なものではない。
「何枚ぐらいありそうだ？」
「この量からすると、二十枚はありますね……」
山本が沈んだ面持ちをして黒紙を見ている。
今にも吐きそうな顔色の悪さで、耐えていた。
「山本、しっかりしろ！　配達するのは私たちの仕事だ！」
「は、はい……」
この配達は山本には荷が重過ぎることは間違いない。
兵役免除者が黒紙配達など、自殺行為に等しい。戦死家族に罵倒されるレベルではない。
それはるかに超えた仕打ちが山本を待っているはずだ。
それほど兵役免除者には風当たりが強い。
それでもこの量は箍野全域に広がるから、どうしても三人で配達しなくてはいけない。
山本には辛いが頑張ってもらうしかなかった。
私は自分の配達地域に仕分けされた黒紙を受け取る。
「配達に出てくる。」
私は他の二人より早めに郵便局を後にして、悲しみの配達に向かった。

その夜。
私は珍しく書斎で、白い便箋と格闘していた。
万年筆を使い、紙に書いては失敗し、屑入れに投げ捨てる。
それを何度も繰り返した。
書いては捨て、書いては捨て。
何度も文章を推敲した。
今日あった黒紙の配達を思い出す。その配達の住所が書かれた中に、彼女の住所が明記されていた。配達途中にそれに気づき、目を疑った。
急いで、自分が配達しようとしていた黒紙の宛名を見て、脱力してしまった。
その一枚には、こう書かれていた。
彼女の住所と、宛名の水原綾芽という名前。殉死者は――――殿、と。
運命の悪戯なのか、この世に救いが無いのか、何で水原綾芽にこんな現実を突きつけるのか、彼女に何と言えばいいのか、今なにを考えればいいのかさえ、分からなくなってしまった。
あの黒紙のせいで今までとこれからの平穏が、泡のように壊れてしまった。
最期の黒紙を持って渡す段階になった時、水原さんにその黒紙を渡すことは躊躇われた。
だから私はその黒紙を隠して、彼女には恋人が死んだ事を伝えなかった。
郵便局員としてあるまじき行為とも言えなくはない。
その代わりとして、私が彼の幽霊作家になり手紙を書くことにした。
明日、この手紙を読み聞かせるために。
少しでも希望を持って欲しいために。
彼女をただ守りたかった。

「体の調子は、いかかですか……と」

書き慣れない書体で、一枚の手紙をこっそりと借りて、その文調を真似る。

――違う。そう失敗しては紙を丸め、簡単に捨ててしまう。

それを延々と繰り返して……私は書くのを止めた。

椅子の背もたれに寄りかかり、染み汚れた天井を見上げる。

「どうして……こんな事になってしまったんだ……」

誰も居ない一人の書斎に空しい後悔が響いた。

そしてまた筆を取る。

出来るだけ自分の思いを彼の想いに近づけて。

それが例え代用品だとしても、この手紙には手が抜けない。出来るだけ似せる。

自分の気持ちを無視して、あの恋人になりきって手紙を書き続けた。

彼女が望んでいるのは完璧な彼の手紙なのだから。

私の徹夜はこれからも続くのだろう……

告解の序幕（後書き）

さらに悲劇は加速していく

坂本は、どうやってこの苦しみから彼女を助けようとするのか

理由の間幕へ

理由の間幕（前書き）

苦しみを知る中で、自分に出来ることはなんなのだろうか？
大切な人に生きる希望を持たせるには、どうしたらいいのだろう？

理由の間幕

理由の間幕

「苦しいよ……　――――さん」

水原綾芽が泣いていた。
夢の中で恋人の名前を呼ぶ。
彼女が見ている世界は、恋人の居ない非現実の世界。他は何も変わらない、いつもの日常の世界だった。
気付くといつもの寝床にいて、あの人の名前を呼ぶと信じられない恐怖と立ち会う。
あの人が傍に居ない…
いつも傍に居てくれたあの人の声も聞けず、あろうことか、気配すらしない。
目が見えずとも、傍にいれば必ず匂いと気配で、存在を感じ取れたはず。

「どこなの？」

手探りながら、彼女の手が空を泳ぐ。
焦りながらも、家の中を捜し歩く。
おぼつかない足取りでただ一心不乱にあの人を探す。
それでも居ない。
何処にもいない。彼の温もりがわからない。
水原綾芽は激しく息をしながら、今度は家の外を探す。
裸足のまま、むき出しの砂利道を。

ただひたすら走った。
眼が見えなくても走り続けた。
ただ愛する人の幻想を、追って。
何度も転び、何度も塀にぶつかって、何度も人にぶつかろうとも。
地面を這ってでも前を目指した。
体中が泥まみれになっても諦めなかった。

（どこなの！？）

もう叫びになっていた。
あの人が居ない恐怖で押しつぶされそうだった……
居ない、居ない、居ない居ない居ない居ない居ない居ない。
もしあの人が居ない世界で生き続けるなら。
――消えてしまいたかった。

「――――――――――――――――――――ッ！！」

そこで必ず悪夢は覚める。
自分が何かを叫んでそこでいつも夢の世界は終わる。
気付くと彼女は涙と汗にまみれて、泣いていた。
息さえも途切れ途切れで、ただ苦しみを吐き出すように泣いていた。
まるで意識とは別にして、もう1人の自分が勝手に泣いているかのように。

「大丈夫ですか？」

「誰ですか！？」

「あ、すいません。郵便局の坂本です。またお手紙が届いたので、

お持ちしました」

まだ、お昼を過ぎたところだった。

郵便配達を何時もしてくれている人がいつのまにか近くにいた。

最近、フネさんの代わりに手紙を読んでくれている人だ。フネさんが忙しい中で、代わりにその読む役を変わってくれた変な人だった。

でも、その手紙を優しい声で読んでくれた。今の現実を忘れてしまうかのような、暖かい男の声で、それを懐かしい恋人の声と勘違いしてしまいそうになった時もある。

「本当に平気ですか？」

知られてはいけない、この人には。もちろんフネさんにも。

本気で心配してくれているこの人たちにこれ以上の迷惑をかけることは出来ない。

自分の思いを必死に隠して、郵便配達員から顔を背ける。

「大丈夫ですから」

「あの、それで今日の手紙はどうしますか？　読みましょうか？」

「すいませんが、1人にしていただけませんか？　少し眠ったら汗をかいてしまって、これから着替えようかと……」

「あ、し、失礼しました。それでは！」

郵便配達員の声に少し、照れが入っているのが分かった。

ぱたぱたと、足音が中庭から聞こえなくなった途端、緊張が解けて我慢していた涙がこぼれそうになった。

「――――さん…」

何時もあの夢を見る。

あの人がいないだけの、日常世界。たぶん、この夢から逃れるには、今すぐあの人と幸せになれれば、いいと思った。

でもそれも、出来ないことも知っている。

ぽたぽたと、泣くことしか、出来ないことも分かっていた。

2

あの黒紙からもう十数日たつ。水原さんに秘密を知られないように、私は三日に一度は手紙を書き、それを読み聞かせ、彼女を喜ばせているはずだった。

事実、彼女は喜んで手紙を受け取って聞いてくれた、が。

それでも、今日見たように彼女は泣いている。

迫り来る恐怖に飲み込まれないように、夢の中だけで。心の中では彼女は本当に、苦しんで、泣き叫んでいた。

見ているこちらまでもが、泣き出しそうになった。

もう彼女は限界だ。

このままでは彼女は心を失ってしまうだろう。それを防ぐためには、何が出来るのだろうか。

――――その辛さを彼女の中から消してしまえばいい。

そんな馬鹿なことを思いつき、頭から振り払う。

だが他にどうすれば、彼女の心を助ける事が出来るというのだろう。

どうすれば、彼女の心をここに留めて置けるというのだろうか。

その時、私はあの時の不思議な友人との出来事を思い出した。

だから、その日の夜、私は悪魔の電話を友人にかけた。

「もしもし、如月だが。ん、……彰か？」

「……忠光」

私は次の言葉が見つからず、言い淀んでしまった。伝えたいことが他にあるはずなのに。

それを見越したのか、忠光はその雰囲気を察知して先に切り出してくれた。

「忘れさせたいのか？」

「……ああ、あの話は本当なのか？」

「本当だ。本当に思い出を忘れさせることが出来る」

「なら、頼む忠光」

「……、幻想とは思わないのか？」

「……思いたいさ。だけど、どうしても忘れさせたいんだ」

「……本気か？」

水原綾芽の笑顔と泣いた顔が思い浮かぶ。

「ああ。私は信じているよ」

「分かった……だが、これだけは言っておく。勿忘草は、飲ませた人の思い通りに、忘れさせることができる。あれは人智を超え、人

の手に余る物だという事を肝に銘じておけ。あれは…呪いだ。もしも使う決心が出来ないなら、すぐに燃やして消せ」

「？」

「勿忘草を三輪送る。お前のところに着くのは、三、四日後というところか……」

「わかった、待っている」

その三日後、確かに三輪の青紫の花をつけた小さな草が送られてきた。

だがもう少し、時間を置いて、他の方法を考えてからでも遅くは無い。

きっとこれを使うのは、何も出来なくて、仕方ない時になるだろう。

もしかしたら、これにそんな力が無いのかもしれないのだから。

理由の間幕（後書き）

そして、坂本は懺悔をしても悔やみきれない闇を抱えることになる。

忘れさせた報いは、懺悔を以ってしても、償いきれないものである

ことを、まだ彼は知らない。

懺悔の終幕（前書き）

逆らえない、必然なのか

それとも、運命だったというのか

坂本には、それが自分の選択によって起きてしまったことを、わかってはいない

懺悔は、気づかぬからこそ、起こるものであり、懺悔しても気づくのは自分の罪だけ

懺悔の終幕

懺悔の終幕

懺悔の終幕

「坂本さん、どうしたんですか？」

水原家から仕事場に戻って来てから、私は一言も口を聞いていなかった。

私の手が震えた。カタカタと…。この震えがずっと止まらない。

口も聞かず、泥に汚れている制服を着て、うち震える姿を見れば誰でも心配に思うだろう。

「……わ、私は」

自分の頭に震えた両手を持っていき、髪のセットがくずれるほど強く掴む。

目を瞑り、私は今までの事を思い返した。

「何て事を……　――ッ私は！！」

「坂本さん？」

山本拓が私を心配するように声を出した。

「私はあの人の辛さを思って！！　――だからッ！！」

強く自分の机を両手で叩く。部屋中に鈍い音が響いた。

だから、私は……勿忘草を。

「山本……お前なら、信じられるか！　ずっと待ち望んでいた人が死んでいたなんてッ」

「？　！！もしかして……み、水原さんの事ですか？」

そうだ！　水原綾芽の事だ！！

「私は……あの人の、水原さんの恋人が死んだという手紙を！！私は彼女を傷つけまいと思って！！　……その手紙の内容を私がすりかえて読んだんだ！！」

死んでない！！と。

どうしてもあの人の悲しむ姿だけは見たくなかった！！

数滴、私の瞳から涙がポツポツと机に落涙した。

「手紙の内容を……すりかえて読んだ？」

「そうだっ、私は…目が見えないのを良い事に彼女にッ、嘘をついて！」

でも、私はやってはいけない事をしてしまったのだ！

「私は！その後も彼女に偽の手紙を読み続けたっ！！」

彼女の恋人は殉職したのに。

手紙はもうどうやっても来ないはずなのに。

それなのに手紙は、信じられない事に、彼女の手元に来た。

そして、手紙の中では彼女の体調を厚く心配した。

その矛盾。
私の涙はもう止まらない。
「？」
「それは私が書いた、偽の手紙なんだぁッ！！」
「えッ！！？」
「私が、死んだ恋人の代わりになって！水原さんのために！　ううあッ……！」
出る言葉出る言葉が、私の頭の中で混乱して、うまく伝えられない。
悲しみと罪悪感とが、私の内心を揺さぶり、言葉の代わりに涙だけを溢れさせた。
「黒達命令が出て、私の地区はたったの四枚だった……。その時はまさか、あの人の黒紙があったなんて！！」
あの時の、一斉黒達命令。この郵便局に来た黒紙は全部で二十数枚……
そのうちのたった四枚が。
家を回る度に、一枚一枚……無くなっていく。
そして黒紙が配達された家族には、何度も野次られ、罵倒された。
大声で「万歳！！」と、「本国万歳！！！」と言って、無理な笑顔で泣き叫ぶ家族を私は見ていた。
その地獄を見て、私は。
正直、ほっとしていた。
その度に私は安堵していた！

「私は、黒紙の住所は見なかった。配達するその時まで、見る事が出来なかった」

水原綾芽の配達場所は最後。

「それまでに……無くなれば良いと思っていた……」

だけど、残ってしまった。

一枚だけ、薄く冷たい、悪夢の三行半状が。

「その時だけは、私はどのようにして水原さんの所へ行ったか、覚えていない……。呆然としていて、これがいつもの日常だなんて……」

信じたくなかった。

「フネさんの表情が凍りついたのだけは覚えている」

その震える黒紙を前にして、私はフネさんに顔向けする事が出来なかった。

「坂本さん……」

「フネさんが、酷く辛そうに見えたから。壊れそうに見えたから、私は言ったんだ。『辛いのならば（・・・・・・）、貴方の代わりに。私が水原さんに伝えましょう』と」

自分の震える両の手の平を凝視して、思い返した。

馬鹿だった、と。

あの人の引導を渡す役目を自ら背負ってしまって、普通なら、そんな過酷な運命を背負わなくても良かったはず。
だが誰がこの現実についていけるのだろうか…
日常が崩壊するほどの絶望と変化を持つ黒い紙。そこにもう彼女の恋人が生きているという奇跡など望めるはずが無かった。
話す言葉すら、周りの時間ですらが、微動画のように遅く感じた。
水原さんを前にした時。

「あの人を前にして、私は……泣き出しそうになった」

なぜなら、水原綾芽は。
――笑っていた。
黒紙が私の手にあるのを知らずに。
その私を目の前にして、彼女はいつものように笑っていた。
ただ、恋人からの手紙が来たと思って。
私は何か言葉に詰まって、必死に涙を我慢した。
彼女の笑顔が自分の心を酷く揺さぶって、苦しませた。
そして私は決断した。
私は、フネさんと水原さんの前で、その黒紙を読み聞かせた。
その手紙を、普通の手紙として。
ありふれた、日常の手紙として。
元気にしていますか、と。
書かれてもいない、文章を私は読んだ。

「フネさんにも事情を判ってもらって、この事は後で伝えよう、と決めた」

しかしそれでは欠点が残ってしまう。
手紙がもう二度と来ないという欠点が。
それだけはどうしても、早急にどうにかしなくてはいけなかった。

あの人だけには絶対に勘繰られてはいけないのだから。

「だから、私があの恋人の代わりになって、幽霊作家となった」

あの人の為だけの、専用作家。

言葉は汚いかもしれないが、それでも一生懸命書いて、彼女にその手紙を読み聞かせ続けた。

いつもと変わらない日常を守る為に。

手紙さえ着続ければ、彼女はいつものように笑っていられる。

「そう思っていた……だが」

――違った。

それでも彼女は泣いた。夢の中で、あの恋人の幻想を必死に追い続けて。

もがき苦しみ、言葉にならない葛藤を吐き、ただただ涙を零した。

手紙だけでは、彼女の心を繋ぎ止めてはいられないのだ、とその時気付いた。

必要なのは恋人という実体、存在なのだと。

いつか帰ってくると、彼女はその日を信じて、夢の中で苦しみ続けた。

日常では笑い、夢の中では今にも死にそうに、もがき苦しむ。

それを彼女は繰り返していた。

――地獄だった。

見ている私も、それ以上に苦しむ彼女自身が。

だから、私は決めた。

その苦しみ、悪夢を見続ける薄命のような彼女の姿を見て。

私は信じられない事を、実行した。

「忘れさせた」

「は？」

その黒紙が届いた十五日後に。

全てを忘れさせる草、勿忘草を使って。

「私はあの人の思い出を忘れさせた！」

「あ……な、何言ってるんですか？　忘れ、させるって、そんなの……」

無理。だが、

「……出来たんだ」

「！！」

「今でも信じられない。あの草が、人の思いを忘れさせたなんて……」

「く、さ……？」

あの青紫の小さな花をつけた綺麗な草。普通に見れば、可憐でとても美しいものだったはず。

だがその清麗さとは違い、それは忘却の草だった。

「友人が言ったんだ。全てを忘れさせる草があると。私も半信半疑だった。だけど、なぜかそれに心が強く惹かれてしまって。他の方法も探した。何か彼女を助けるような方法を悩みぬいた！でも、そんな奇跡なんてなかった。だからッ！　私はあれを、使ってしまっ

たんだ……」

その時の私はどうかしていたのかもしれない。

そんな得体の知れないものを使うと決断してしまったのだから。

「飲ませた後、私は彼女に確かめた」

……

祐介君の手紙です、と。

まだ疑心が振り払えず、ただの確認として彼女に聞いた言葉だった。

本当に彼女は忘れてしまっているのだろうか？

恋人。

そう彼女が応えてくれたら、嘘くさい話に騙されたのだ、と納得もできただろう。

だが、そこで述べた言葉は。

『誰ですか、その人？』

簡単にはっきりと彼女は言い捨てた。氷のように冷たく、無関心な態度で。

自ら最愛の恋人の名を、遍く否定した。

その余りにも素っ気ない態度が、私には演技には見えなかった。

嘘でも偽っているわけでも無かった。

いや、演技でさえも在りえなかった。

「本当に彼女は、自分の恋人（かもがわゆうすけ）に関する事、全て忘れていた……」

「そ、そんな……」

「フネさんと私は共に魂が抜けたように、立ち尽くしていた。今、

起こっている事が現実なのか、分からないまま……。その後、彼女が言ったんだ」

私がした質問の真意も分からずに、腑に落ちないような表情をして、彼女はこう述べた。

その言葉は、鴨川祐介に対する最後の思い出のカケラ。その片鱗。

『でも、私。なんで、手紙を心待ちにしていたのかしら……』

「その言葉を聴いて、私は無我夢中で家を飛び出した」

一目散に。

自転車を乗ることすら、忘れて。ただひたすら、ひたすら走って逃げた。

彼女が全て忘れさったという、現実を前にして。

あの人の恋人の事、全て忘れてしまったというのに、妙にすっきりした水原綾芽の表情。

私は、それに畏怖した。

まるで巨大な闇から逃げるように、気付いた時には郵便局の前にいた。

そして魂が消えたように、地面に力なく倒れこんだ。

それが今までに起こった真実。

現実に引き戻されたように、蝉が絞り出すような声がはっきり聞こえた。

机にある、無機質な書類を見つけ、憎む。

そして薄汚れた木の机にあった書類を、手の平でぶち撒けて、私は叫んだ。

「ただ私は！！」

書類が花びらのように、ハラハラと舞った。
そのまま床に崩れ落ち、苦渋に満ちた山本の顔を見た。
「あの人の！」
痛いほど、ぎゅっと、自分の拳を握り締めて、床を強く叩く。
「あの人の……辛い思い出を、忘れさせてやりたかったッ」
「……」
いつのまにか、蜩の鳴き声が止んでいた。
「それだけなんだ、あの人が苦しむ姿なんてッ！悲しむ姿なんて……」
見たくなかった。
瞼の裏に焼きつく、あの人の笑顔。
あの笑顔だけは奪われたくなかった。
「だか――」
「だから、忘れさせた。ですか？」
山本が私の言葉をそのまま引き継いでいた。
だが、その言葉には明らかに怒りが込められている。
「山、本……？」
「坂本さん。信じられません。例え本当に、人の思いを忘れさせる

ものがあったとしても……」

山本の顔は苦悶に満ちて、唇を噛んでいた。そして、体が小刻みに震えていた。

山本は数秒溜めて、思い切り声を張って叫んだ。

「それを使っては、いけないはずでしょう！？」

「――――」

――――図星だった。

判っているつもりだった。

本来ならありえない出来事なのだ。

人の思いを忘れさせる事が出来るなんて、普通はありえない。

そんな事は私自身、よく判っていた。

それが、人の悲しみも苦しみも、例え全ての思い出を忘れさせられたとしても。

私はその現実に在り得ないものに頼ってはいけなかったのだ。

でも、私は信じてしまった。

そんな異質たる存在を信じてしまっていた。

それでも私には、それを使いうる理由があった。

――――どうしても、あの人に苦しんで欲しくなかった。

というその理由が。

「だが、彼女も思っているはずだ……恋人が死んだ真実なんて聞きたくなかったって、そう思っているはずだ。だって、そうじゃないか、真実を聞いてしまったら、絶望どころか彼女は……」

生きてゆく理由すら無くなってしまう。

口火を切って出た紛い事は、苦しみを全て吐き出すように、止まらなかった。ただ、言い訳をしてでもこの苦痛から逃れたかった。これ以上苦しむ事が震えるほど怖かった。

「……」

「だから、彼女は幸せなんだ。辛いことで苦しまずに、忘れられて幸せなんだ……」

頬を微妙に引き攣らせて私は笑った。本心からか、それとも嘘として貫き通したいからか、自分でもよく分からない。

もう自分の心は滅茶苦茶に打ち拉がれていた。

「……ふ、ふざけるなッ！！」

瞬間、大声と共に大きく振りかぶった山本の拳が、鈍い音とともに頭に響き、私の右頬に直撃した。

近くにあった椅子を巻き込んで地べたに不様に倒れこむ。

「ぐッ、な、何を！山本ッ……」

「坂本さん！！どんなに辛い事が在ったって、人の思いをそう簡単に忘れさせてしまう事が許されるわけがない！！」

それが例え出来るのだとしても。

口の中で鉄臭い味を味わい、山本の怒声に私の体は固まっていた。あの気弱い性格の山本が　ここまで激怒するなんて、私自身今までに見たことがなかった。

山本が私のシャツの襟元を強く掴む。

「辛い事だって！人間の思い出の一つなんだ！！　――辛い思い出だって！人間の幸せなんだ！！」

心の奥底から山本が叫んだのが分かった。

呆然と私は山本の苦しみ、歪むその顔を直視した。

「それに忘れる事が幸せかどうかなんて、勝手に決めないで下さい！！　――思い出はその人のものなんだ！！勝手に不幸か幸せか、本人じゃないあんたが決めていいはずがないんだッ！」

「ち、違う。私は、そんな」

「坂本さん。貴方は最低だ。人の思いを踏み躙って、何が幸せなんですかッ！！？」

私の心の根幹が揺れる。絶対に壊されたくない、信じたくないその最後の砦が。

山本がまるで自分が苦しんでいるかのように、思いを吐き出す。

「何より思い出は、忘れる為にあるわけじゃ、ないんだ……」

「！！」

「思い出は、ずっと忘れない為にあるんだッ！！」

思い出とは、楽しいことだけを指すのではない。辛い思い出を含んでこそ、思い出といえるのだ。人間だからこそ、辛い事や悲しい事、そして楽しい事が分かるのだから。思い出は人間が生きてきた歴史と同じものなのだから。

何よりも、人間は思い出と共存する事が出来るのだから。
体中の力が全て抜け出てしまうのが分かった。もう重力にすら逆らえないほど、心が死んでしまった。出来るならこのまま、泣き叫び、一生苦しんで…死にたかった。
でも、もう起こってしまったのだ。私が彼女の人生を変えてしまったのだ。
もう変えられない不変たる事実にさせてしまった。
それをまた変える事にも無かった事にも出来ない。
忘れさせても、何も変わらなかった。

「なあ……山本。私は……どうすれば、いいんだ？」

責任があっても、私にはその取り方がわからない。
それほど弱い自分に、今更ながら気付いた。
そんな自分に馬鹿馬鹿しくて、私は小さく笑った。
思わぬほど弱々しい声で、山本に聞こえたのすら分からないほどの声で。

「……」

「なあッ！！　私は、どうしたらいいんだッ！！」

山本の襟首を千切れるかと思うぐらい、強く掴んだ。
泣きながら。
苦しみながら。
私の言い知れない感情をぶつけ、縋った。山本に縋る事自体間違っているのかもしれない。
それでも私は一層強く、山本の襟首を掴み離さなかった。
離せなかった。
何かで償って、起こった事全てを帳消しにしてしまいたいと切に

思った。
全てが幻のように、掴むことのできない水月のように。
ただ私は。
——自分だけが大切だった。

「苦しめよ」

「　　うぁ？　　」

「ずっと、死ぬまで。人間の大切なものを奪ったんだ。その咎、落とし続けろよ」

存在理由に等しいものを奪ってしまったのだから。

「あ、ああっ、うわあああっ！！！！！！！！！！！！！！」

ただ、その場で崩れて、泣くにも似つかない、苦しみの声を上げるしかなかった……
山本の冷酷な言葉が、私の存在意義全てを否定した。
人の思い出がここまで、重いものだとは気付かなかった。
人の思いを踏み躙る事が、こんなにも痛いものだとは知らなかった。
それが、私の業だった。

その後、私は自宅で数日間自主謹慎をしていた。
あの出来事以来、どうしても郵便局へは行く気がしなかった。

この数日間、やる気がなくなったようにずっと引きこもっていた。
いつもの日課のように郵便入れを確かめると、私のところに二通の手紙が来ていた。
茶色の封筒と紫色の封筒。
その一つ、茶色の封筒は水原綾芽からの手紙だった。私は驚きを隠せず手紙を確かめる。
その茶色い封筒の日付は……

（勿忘草を飲む前……！？）

つまり、私があの人の記憶を忘れさせる前、という事だった。
私はおそるおそる封筒を破り、中にある純白の紙を出した。
そこには――
『拝啓、坂本様。近頃の御調子は如何ですか。先日、私はあなたがいつ来るのかと思慮してい　ました。貴方に話しておきたいことがあります。
ごめんなさい……
私は知っていました。あの人が殉死した事を知っていました。
あの時、私は貴方たちの話を不意にも聞いてしまって、あの人が死んだことを知りました。　正直、その夜は辛くて悲しくて眠れませんでした。このまま…深い眠りに就きたいとも思いました。
しかし、絶望にかられて泣いていたとき、貴方が来てくれました。
覚えていますか？
あの人が死んだことを知っているとは知らない貴方が、あの手紙を持って。そしていつものようにフネさんが読み聞かせてくれました。あの人を装って書いた無骨で稚拙な文章でしたけど。
でも、嬉しかった。
貴方の思いがとてもこめられていましたから。
どれだけ私のことを思いやってくれたのかが分かりましたから。
最初は恨みました。貴方が、持ってきたあの忌々しい黒紙に。

最初から貴方には罪なんてない事を承知でした。誰かを恨んでいなくては生きていけなかったのです。
貴方の……手紙は嬉しかったです。例え、あの人からでは無いのだとしても。
お願いです。もう一度、貴方の声であの手紙を読み聞かせてください。
貴方の声をもう一度……聞かせてください。
敬具、水原綾芽。』

私は意味もなく叫んだ。

彼女は知っていた。知っていたのだ。
あの手紙が、私が書いたものであって、その中に書かれた言葉は全て偽物である事を。
手紙の持つ手が小刻みに震え、文面が揺れる。
恋人じゃない、私からの手紙だと。
なにより、恋人が戦場で死んだという現実を。
彼女は知っていたのだ。
文面にはっきりと書かれている。
全ての事情を知っていた、と。
その事から分かるのは……
彼女自身、悲しみから絶望から立ち上がろうとしていた事。
心の傷から一生懸命、這い上がろうとしていた事。
そして生きようとした事。
彼女は苦しくても生きる道を選んだ（・・・）のだ。
だとしたら、忘れさせた意味がない（・・・・・・・・・・・・）……
…のか？
そうだとしたら、私のした事全てが無駄だったという事。

ただの私の独り善がりだったという事。
勿忘草はいらなかったという事。
つまり――私が彼女を殺したのだ。
彼女の生きる意味を勿忘草という凶器を使って。
絶望だった。
知っていましたという文面が涙によってもはや見えない。

「……！！」

声すら出なかった。
言いたい事が沢山ある。
だけど、唇が震えて、頭が混乱して、言葉が無い。
ただ、ガタガタ震えるだけ。壊れた玩具のように。
その白い手紙を力いっぱい握りつぶして。
そして今にも泣き出しそうな声で、やっと弱弱しく声を搾り出した。

「う、そだ……」

もう一枚の手紙、紫色の封筒を見据えながら、彼の物語は終わった。

懺悔の終幕（後書き）

なぜ、生きようとしていたのか

どうして、絶望に彼女は立ち向かえたのか

どうして、大事な彼を待っていたのか

それは、二人の誓いが何よりも強かったからに他ならない

最初から物語は決まっていた

必然の幕引きへ

必然の幕引き（前書き）

彼の手元に来たのは絶望
彼女の目の前にあるのも絶望
そして二人の間にあったのは、何だったのだろう？
必然の終幕

必然の幕引き

必然の幕引き、祐介と綾芽の出撃前夜

二人には約束があった。
何があっても、絶対にこれだけは守ろうと、そう決めあった。
あの出撃前夜の、あの二人の別れの日に。
泣かずに、笑いあって、決めた。
二人には分かっていた。
――二度と逢えない事が。
なぜなら、彼の手元に来た手紙は、特令紙。
白紙でも。
赤紙でも。
黒紙ですらもない。
それは紫の封筒なのだから。
通称、特別指令召集紙。略して、特令紙。
軍部からの特殊任務出動要請のことである。
それは、生還率が限りなくゼロという意味でもある。
内容は……回天令。
そう命名されてあった。
内容は敢えて言わない。

「綾芽さん、お願いがあります」

目が見えない綾芽に気取られないよう、必死に震える声を我慢して話した。
もう、自分の目からは止めどない涙が溢れそうだった。

「もし、もし僕が……」

――――戻らなくても、あなたは幸せに生きてください。
そう宣告した。
自分が死ぬのに、人のことを心配できる自分が不思議だった。
死への恐怖。体が竦むほどの異常な恐れが体を蝕む。
だけど、これから行く戦場はそんな生半可なものではない。
それ以上の恐怖が待っているのだ。
それならば、せめて。

「あなたを、生きる希望にさせてください」

僕が死ぬまで、そして死んだ後でさえも。
綾芽はそれを聞いて笑った。
クシャクシャになって笑った。
何も言葉を返さない。
今にも喚きだしそうなほど、苦しんでいる綾芽は。
ただ、震えて、笑って、でも泣かずに。

「い、……て……さい」

「……？」

「……生きてください」

そう言っていた。
やっとのことで返してくれた言葉がそれだった。
その言葉が、自分の封印してきた思いを揺さぶる。

「うッ、あ……ッ、うぅ……ああッ」

思わず溢れる涙を必死に我慢した。
でも必死に我慢しても溢れてくる声が、嗚咽となって響いてしまう。
笑おう、と。そう誓っても、限界だった。
――思いもかけない事に、僕は大声で叫んでいた。
「忘れないでくださいッ（・・・・・・・・・・・・）！！僕の事を（・・・）！！」
死んでも。
消えても。
例え、生きて帰ってきたとしても。
ずっと、永遠に。
「お願い……だからッ」
自分が死んでも、忘れないでほしかった。
彼女が幸せに生きてくれて、そして、自分のことを忘れさえしなければ、自分はどんな恐怖にも打ち勝てるような気がした。
「祐介さん……愛して、います。――決して忘れません。絶対にあなたを待ちますから、笑顔で待ち続けますから（・・・・・・・・・・）」
そう言い切って、
「だから、今日だけ……お願いです。一緒に泣いてください」
――泣いてください、と。もう一度震える小さな声で、綾芽は儚い願いを言った。

ああ、と頷きながらも、綾芽の顔は涙で見えない。
この世で一番愛する人が。
最も大切な守りたい人が。
涙で見えない。
――それなら（・・・・）
僕は綾芽に近づき、自分の涙が零れている頬を彼女の頬にくっつけた。

「こうすれば……一緒に、泣ける」

彼女の息づかいが頬に感じるぐらい近く、温もりを感じるまで近く。
綾芽には目が見えないので、僕が泣いているのかが分からない。
それなら、頬をくっつけあって泣いている事を確かめ合えばいい。
二人で一緒に泣くために。
二人で泣いている事を分かち合うために。
泣きながら、強く抱き合った。
二人とも泣き声は出さなかった。
ただ、堪えきれないほどの思いと涙が頬を伝うだけだった。

そして、二人は別れた。
この先、きっと未来で、二人は絶対に忘れないだろう。
この時のことを。
どんなことが起ころうとも、二人の思いは消えるはずはない。
水原綾芽はこの時誓った。絶対に生き続けよう、と。
そうして、水原綾芽は手紙を待った。
愛する人の手紙を……

必然の幕引き（後書き）

その後、坂本彰は郵便局を辞めた。
彼の行方はしれない。
それが、また新たな悲劇を生み出すとは知らずに。
覚えていてほしい。彼の手元に来たもう一枚の手紙を。
そして、残った二輪の勿忘草を。
それが引鉄になり、悲劇をもたらす。

手紙は幸福をもたらさなかったのかもしれない……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9660e/

勿忘草其二　あなたの声をもう一度…

2010年10月15日09時51分発行